

「周辺」にみる国民国家の拘束性¹

—台湾人の八重山観光を通して—

上 水 流 久 彦

はじめに

1. 八重山と台湾の歴史的関係
2. 八重山観光にみる異文化摩擦
3. 八重山観光にみる異文化摩擦発生の要因
4. 国民国家のなかの八重山観光

終わりに

はじめに

本稿では国民国家の「周辺」の観光活動を事例に、トランスナショナリズム論への批判的再考の必要性を述べる。トランスナショナリズムは現在、社会科学の領域で注目されている現象である。トランスナショナリズムの概念を整理した上杉によれば、トランスナショナリズムは、①複数の国の国境を越える現象であること、②長期間継続する現象であること、③規則的ないし頻繁に見られる往復運動であること、④多元的帰属意識ないしネットワークが形成されていること、と述べる（上杉 2004：20）。すなわち、一過性で一方的な移動ではなく、長期的かつ双方向的で脱国家的な現象である。

トランスナショナリズムの基盤が、ここ10数年で急速に進んだグローバリゼーションである。グローバリゼーションの時代には、人、モノ、資本、情報が国境を容易かつ頻繁に越えるとされる。そのような状況は交通網の発達、資本の自由化などを基盤に経済構造の一体化に負うところが多い。さらに情報分野におけるインターネットの発達というIT革命は、一定程度経済が発達し、インフラが整備された地域におけるという限定付きであるが、そのような地域に住む多くの人々に「On Demand」という欲しい時にいつでもどこでも情報が得られ、伝えられるという状況を授けた。すなわち、場所と時間による拘束性の解体による、グローバルヴィレッジ時代の到来を予想させた。

1 本稿は島根県立大学北東アジア地域研究センターの「交錯する北東アジアアイデンティティの諸相研究会ワークショップ」（2010年3月15日、島根県立大学において開催）で発表した内容に基づいて執筆した。ワークショップにおいて貴重なご意見をくださった方に感謝申し上げます。

だが、そのような予想に対して、都市研究の一派からは早くから疑問が呈された（カステル 1984、植木 1996）。例えば、植木はグローバリゼーションによって場所の非拘束性が進むはずなのに未だにニューヨークや東京が中心地であるのはなぜなのかと問いかける。そのような疑問に対して植木は、些細な情報も含めた対面的な情報交換が情報の価値の創出には重要であることを指摘し、情報の流通はIT革命では可能だが、意味の創出においてはIT革命が場所の拘束性を解体することは不可能であると述べる（植木 1996：18-27）²。重要な意志決定や価値づけにおいて対面的かつ密接なやりとりは重要であり、植木の主張を裏付けるものであろう。

しかしながら、場所の拘束性は価値の創出におけるだけの問題であろうか。情報の単なる流通においても場所の拘束性は「On Demand」の現在でも、なお大きな力を持っていると思われる。国民国家のシステムを基盤に構築されている現代社会において当然のことかもしれないが、国民国家間の「境界」は情報の流通の点で大きく作用し、誤解を生み出す要因になっていると考えるからである。以下では八重山という日本の「周辺」における台湾からの観光を事例にこの点を論じる。なお、ここで述べる「周辺」とは地理的に日本の周辺に位置すること、その地理的条件に基づいて政治的、経済的、社会的に日本国内において不利な立場にあるという当該地域に対する内外の認識を意味する。

まず、ひとつの事件を紹介することから始めたい。その事件を筆者は「八重山そば拒否事件」と名付けている。基隆を基点に石垣、宮古島、沖縄本島（那覇）の観光を楽しむツアーがある。スタークルーズというマレーシアに本社を置くクルーズ会社によって運営され、カジノが常設された船（以下、スタークルーズ船）の中で公海上それを楽しみ、昼は各寄港地を訪れるというものである³。客の大半は台湾人⁴で、石垣に初めて寄港したのは1997年3月15日である⁵。

筆者が2004年の調査中に石垣で耳にした話が、八重山そば拒否事件である。スタークルーズ船が就航した初期の頃、八重山の人々が台湾の観光客を迎えるにあたって、歓迎の

2 中心地が中心地である理由は、情報だけではなく、様々な要因が関係していることは言うまでもない。例えば、ウォーラスティンの世界システム論に見るように、中心が周辺を搾取する形で成立している経済構造も大きな理由であろう。

3 2009年度以降は宮古島を訪ねるツアーはない。

4 台湾において、「台湾人」とは誰であるかという問題がある。先住民族の権利確保や、与野党の対立のなかで台湾に元々住んでいた先住民族を指すこともあれば、特に意識されることなく（意識されないことが逆に問題だとする者もいる）、台湾人口の大半を占める閩南人を意味することももある。さらに中華人民共和国との政治的対立のなかで、台湾の独立や主体性の確保を主張する者を、統一や中華人民共和国との関係改善を主張する「中国人」と対比するなかで「台湾人」と呼称することもある。したがって、「台湾人」という呼称は慎重に使うべき用語であるが、本稿では単純に中華民国籍を持つ台湾在住の人々と定義しておく。

5 八重山毎日新聞社・松田良孝氏による。

意味も含めて50名の台湾人に地元の名物料理である八重山そばを用意した⁶。だが、彼らはその料理に手を着けず、スーパーにてパックのマグロの刺身や寿司を買って食べ、地元の好意や伝統文化を軽視したことから地元の人々の不評を買った⁷。このようなすれ違いは、実は八重山と台湾の間で情報が十分に行きかかっていないことによって生み出されている。近接性など一見交流・交易に有利な条件を持ち、頻繁な行き来が植民地時代から続いてきた八重山と台湾においても、またグローバル化の時代とされる現代においても、単純な情報さえ国境を超えることが困難である現実がそこにある。

なお、本稿で観光を対象とする理由は対象地域において観光が大衆化されたことによって、一定程度異文化理解の教養を身に付けた留学生や大企業エリート、外交官等と違う多くの一般の人々の異文化接触を把握できるためである。また、当該地域を取り上げる理由としては二点ある。ひとつは八重山と台湾が近接し、植民地期以降、国境を跨ぐ双方向的な交流・交易が継続されてきたエリアであること、もうひとつは現在、台湾との交易・交流を推進する人々が、国家の制限を撤廃し、脱国家的なエリアをそこに構築しようとしていることである⁸。

1. 八重山と台湾の歴史的関係

八重山と台湾の間は植民地期に「国内」であった地域に国境線が入られた地域である。近代的国境概念がなく移動していた社会に近代的国民国家の概念が導入された地域ではなく⁹、また近代的国民国家の国境の存在が当然視されてきた地域でもない。当該地域はほとんど没交渉とされた地域が約五十年間同じ帝国の領土となり、その後、別の国民国家体制に組み込まれた場所である。そのため同じ国内として移動した人々と国境の存在を当たり前とみなす世代とが存在するという国境について異なったイメージを持つ人々が混在する地域である。

沖縄と台湾の関係に造詣の深い又吉は、台湾が日本の植民地になる以前、すなわち清朝時代、与那国を事例に沖縄八重山と台湾東部は異なる文化であり、没交渉であったと述べる（又吉 1990）。又吉は与那国に残る伝承や物語、馬淵の記述に基づいて、文化的共通性があるというよりはむしろ、与那国は台湾への拒否があったと分析する¹⁰。1871年には漂流した宮古島の住民66人のうち54名が台湾東部の居住する牡丹社のパイワン族の先

6 八重山そばが選ばれた理由として現実的な理由も指摘されている。石垣には他にも名物料理があるが、大勢の人数に対応でき、経済的な料理としては八重山そばしかないというものである。

7 2009年の調査時においても同様の姿を見ることができる。

8 この点において、日本と台湾の二点を結ぶ他地域の観光促進活動とは異なる。例えば、福岡と台湾の交流・交易を促進するとしても、そこで脱国家的なエリアの構築が求められているわけではない。

9 このような地域の研究に床呂（1999）がある。

住民族に殺害される事件が起こっている。

だが、琉球が大日本帝国に沖縄県として1879年に編入され¹¹、台湾が1895年の下関条約によって日本に割譲され、両地域が同じ帝国の領土となるとその関係は大きく変化した。労働力が不足していた台湾では沖縄からの人々が台湾に移り住み、新天地を求めた。「台湾への人的供給源としての沖縄」である（又吉1990）¹²。

八重山と台湾の関係も同様であった。台湾で働くために多くの人が台湾に渡り、さらには進学先を求めて台北市へ移り住んだ。女性は内地人（日本本土から来た日本人）の礼儀作法を身につけ、国語（日本語）を学ぶために台湾の内地人の家にお手伝いさんとして奉公した¹³。

就職、進学、奉公に加え、大けがをした時に担ぎ込まれる先が台湾であった。石垣在住のインフォーマントによれば、日本植民地期に落馬して骨折する大きなけがをしたが、その時に運ばれたのは、台北帝国大学の医学部に付設された病院であった。筆者が台湾なのですと不思議そうに尋ねると、「次に近い、帝国大学の病院は福岡にある九州帝国大学ですよ、遙かに遠いですよ。台北帝国大学の病院は沖縄本土の病院よりも質も高く近くですから」と答えた。石垣と沖縄本島は約450km離れており、石垣と台湾との間は約240km程度である。ましてや九州は図1で示すように彼の言葉どおり遙か彼方である。

与那国のインフォーマントによれば、植民地期、与那国と台湾の間を漁船で往来したという。与那国と台湾東部は約110kmしか離れておらず¹⁴、個人所有の漁船でも4時間ほど



図1

(<http://www.aoikuma.com/okinawamappg.htm#4> 参照)

10 ただし、八重山と台湾東部の民俗習慣を調査している黄智慧は、両者には類似する習慣があり、そこが同じ文化圏にあったのではないかと新たな説を展開し、環東台湾海文化圏と名付けている（黄2000）。

11 最初は鹿児島県に編入され、その後沖縄県がもうけられた。

12 又吉は台湾に移り住んだ沖縄の人々が内地人と区別され、二等国民と差別された実態を指摘している。台湾人は三等国民とされた。

13 台湾人の裕福な家庭に奉公した女性も存在した。そのため台湾人口の多くを占める人々の母語である閩南語を身につけた者も存在したという。

14 これに対して、沖縄本島とは約580kmある。

あれば、台湾に着くことができた。日本本土に郵便を出す場合も与那国から沖縄本島経由で出すより、台湾経由で出すほうが早く着いたと語る¹⁵。そのため漁船で漁業にでる知人に郵便を頼んだのである。また、家で飼っていた豚を漁船に積んで台湾に売りに行くこともあった。そして売ったお金で日用品を買ってきた。このように単に移り住むだけでなく、日常の生活で台湾と八重山とを往来することは珍しくなかった。

これとは逆に台湾の人々が八重山に移り住むこともあった。例えば、石垣に水牛を導入し、耕作労働の質を変えたのは台湾の人々である。また、石垣ではパイン産業が盛んであるが、それは台湾人によってもたらされたものであった（松田 2004）。西表島には日本植民地期、炭坑が開発されるが、そこで台湾の人も働いていた（三木 1996）¹⁶。台湾東部と八重山でこのような相互の人的流れがあった。

だが、上記の関係は 1945 年の日本の敗戦、台湾の放棄によって再度大きく変わる。与那国では台湾との合併論も真剣に論議されたが、最終的には台湾とは切り離された。すなわち国境の再設定である。

再設定直後の八重山と台湾との関係において大きく注目されるものに密貿易がある¹⁷。密貿易では、沖縄からはアメリカ駐留軍の横流し品（たばこ、缶詰、銃弾など）が日本本土や台湾に運ばれ、台湾からは砂糖などの日用品が運ばれた。その密貿易の中継地点として最も栄えた与那国では、ドル紙幣、台湾紙幣、日本紙幣が飛び交っていた（石原 1982、大浦 2002、奥野 2005）。

密貿易は終戦直後から 1949 年まで盛んだった。だが、その後アメリカ駐留軍の銃弾が台湾を経由して当時アメリカが対峙していた中国共産党軍に渡る出来事等があり、取り締まりが厳しくなる。琉球がアメリカ統治期に入る 1951 年には密貿易はほとんど見られなくなる。

アメリカ統治期では細々と密貿易が続けられた。個人がそれで潤うことがあっても、終戦直後のように地域全体が栄えることはなかった。その時期、台湾の人々はサトウキビ刈りを手伝うために八重山に来るようになった。ただし、筆者の現地調査によれば八重山の住人と広く交流するというよりもむしろ、サトウキビ農場や工場との関係者とのごく限られた関係に過ぎなかった。

1972 年に沖縄は日本への復帰を果たすが、その後は自治体間の交流が中心となる。筆者自身は与那国で 1970 年代も密貿易を行っていた人の話を聞いたが、特殊なものに過ぎなかった。日本に復帰したため、サトウキビ農場や工場での労働のために台湾人が八重山

15 当時就航していた船の能力、便数によって台湾経由が早かった。

16 植民地期、日本本土の炭坑労働では朝鮮人や中国人労働者が注目されるが、台湾の人も炭坑労働をしていた。だが、三木を除くと西表の炭坑における台湾の人に関する研究は皆無であり、今後の研究が望まれる。

17 密貿易というネーミングに対して、そのように暗いイメージはなく、日本や沖縄の復興に寄与したことから、「復興貿易」と呼ぶべきだとする考え方が近年ある。

に来ることもなくなった。台湾の漁船などが台風など天候の悪い時に緊急避難的に与那国の漁港に停泊することはあっても、植民地期のように同じ漁場で漁を行い、台湾と八重山との間を往来することはなかった。国境は徐々に強固なものとなっていった。

復帰後、八重山、宮古において台湾の自治体と姉妹都市を結ぶのは、1982年に花蓮市と締結した与那国町である。その詳細な経緯については不明な点もあるが、与那国の建設で必要となった砂利を台湾から運ぶことなどが関係していた。その次が石垣市と台湾東部の蘇澳鎮である。1982年に八重山青年会議所と蘇澳鎮青年商會が姉妹関係を結び、民間交流が開始された。台湾がアメリカや日本との国交断絶、国連からの脱退など、国際社会での孤立を深めるなか、他国と積極的に民間レベルで国際関係を結ぶことが政府をあげて奨励された。その後、姉妹都市の協定が両者の間で1992年に締結された。

戦後の八重山と台湾の民間交流は、那覇、石垣、基隆を結ぶ比較的安価な定期航路によって支えられてきた。その航路は1990年代に経営危機を迎え、最終的には2008年6月に運休するが、それまで台湾から沖縄に日本の物資を買いに来る人の移動を支え、沖縄から台湾への観光を支えるものであった。

今世紀に入り、既述の歴史を背景に八重山では過疎化対策として台湾との交流、交易が積極的に模索されてきた。例えば、石垣のスタークルーズ船、クリアランス船の積極的受け入れ¹⁸、チャーター便の就航、与那国のチャーター便の試験的運航、与那国の開港運動などである。

如何に現在の国家の規制を取り除き、過去のように自由に往来するのか。昔のように自由な往来を理念とする両地域の行き来が、八重山に富をもたらすと八重山では考えられている。言い換えれば、国家の存在こそが八重山の発展を妨げ、「周辺」に追いやっているという認識である（上水流 2009）。パスポートコントロールの排除はできないにしても、国家に拘束されない八重山と台湾とを結ぶエリアの構築が希求されている¹⁹。かつ過去の歴史に基づき、台湾のことは分かっているという認識が八重山の50歳以上の人々に広く見られる。このように現在の八重山の台湾との交流・交易の原動力は過去の交流の体験と記憶から生まれている。

18 以前台湾から直接、中国本土へ行くことはできず、第三国を経由することが必要であった。そのため台湾から近く、入管が整備されている石垣市を経由して中国本土に向かう船が多かった。これをクリアランス船と呼ぶ。国境があるが故のメリットであった。だが、台湾と中国の直航が可能となった現在、このメリットはほぼ失われた。

19 不採択であったが、与那国町は2005年、2006年に台湾東部との交流に関する特区申請を行った。その内容には災害時などに限ってであるが、自由な往来が想定されていた。

2. 八重山観光にみる異文化摩擦

交流・交易において台湾人観光客の誘致も大きな目玉のひとつである。八重山の自治体、商工業関係者の間では、台湾との交易が既述した歴史的関係から地域の起爆剤として考えられてきた。だが、その受け入れはこれまで順風満帆ではなかった。台湾人観光客を受け入れて以降、以下のような問題が五点発生した。

一点目はトイレの使用方法である。台湾では使用したトイレットペーパーなどは流さずに備え付けのゴミ箱に入れる。日本のトイレでは使用後のトイレットペーパーを流しても良いという注意書きがなかったため、八重山においても台湾人観光客は台湾における使用方法同様の対応をとり、使用後のトイレットペーパーが床に溢れるという状態を招いた²⁰。

二点目に食事マナーである。台湾では、魚や肉の骨などの食べかすをそのままテーブルや床に放置するという習慣がある²¹。その習慣を八重山でも行ったため、地元住民の間に「台湾人はマナーがない」という蔑視感情を招いた。

三点目が台湾人観光客を見ると泥棒と見なすまなごしの発生である。筆者のインフォーマントによれば、実際、店先の物を盗む事件があったことは事実であるという。だが、たった一件の事例から「台湾人は手癖が悪い」との噂がたち、なかには台湾人観光客が上陸する時には店のシャッターを閉めるなどの対策が講じられた²²。このような認識は石垣だけではない。与那国で2009年に台湾人観光客を受け入れる時に、地元の台湾通という人物から「台湾人は手癖が悪く、店番は二人いる」と語られた。宮古島のスタークルーズ船の受け入れにおいても「台湾人に物を盗まれた」という話を2009年の調査時に地元住民から筆者は聞いた。

四点目は食のすれ違いである。八重山そば拒否事件を既述したが、それだけでなく、八重山に来て和食チェーン店で寿司や日本



図2 (筆者撮影)

20 これと同様のことは韓国人による対馬観光初期においても発生した。いずれの地域においても、注意書きをすることで現在は解消された。

21 現在、そのような習慣を目にすることは台湾の都市部では少なくなっている。

22 現在は、このような対策は取られていない。

そば、うどんを食べる台湾人をいぶかしがる地元住民と筆者はしばしば接した。台湾人観光客からは、与那国観光において島名産の食べ物だけでなく、典型的な日本料理（彼らに言わせると天ぷらやうどん、寿司、刺身など）を食べたかったという希望が寄せられていた。

五点目は四点目と類似するが、土産にみるすれ違いである。台湾人観光客に与那国町が行ったアンケートでは日本的な土産を求める回答が多く存在した。日本的な土産とは、日本の薬であり、日本の菓子である。筆者は2008年1月に宮古島で開催された100キロマラソンに参加した台湾人の一団と行動をともにした。彼らの買った土産は、土産店にある宮古島らしい土産ではなく、太田胃散という日本の薬や、図2に見るようにポッキーなどの菓子類、昆布などであった²³。ここでも島の名産品を買う日本人観光客とは異なる観光行動が見られた。

3. 八重山観光にみる異文化摩擦発生の要因

このような異文化摩擦・すれ違いの要因は異なった情報に基づく八重山像、台湾像にある。最初に台湾に関して八重山へ伝わった情報だが、最たる典型が第三世界の台湾というイメージである。例えば、那覇、石垣と基隆を結ぶ乗客船に乗って台湾へ旅行した時の記憶から、「タクシーがぼろぼろで、車は汚く、すぐ遠回りをしてお金を騙そうとした」、「道路は舗装されておらず、ガタガタだった」などと語る者がいる。八重山で筆者が聞く限り、1980年代から1990年前後までがその記憶の中心である。そこでは発展途上国台湾のイメージが強い。現在、八重山の人々を安価な値段で台湾へと運んだ航路はなく、50歳以上のこのような記憶の更新はほとんど行われていない。

第三世界の台湾というイメージにはサトウキビ刈り時代の記憶も関係する。既述したように日本政府に沖縄が返還されるまでは、台湾からも働きに来る者も少なくなかった。台湾からの出稼ぎは、きつい労働への従事や質素な服装から貧しい台湾を想起させた。このような台湾像は、現在も50歳以上の人々の記憶に残り、万引きをする台湾人観光客という噂が広く流布する背景になっている。貧しいが故に物を盗むという考えである。

これらとは逆に八重山に伝わっていない台湾の情報として、高級デパートがいくつも点在し、世界のブランドが売られている現在の台北の様子がある。台湾には三越、そごうなどの日系百貨店が多く出店しており、日本の地方都市では販売されていない一流ブランドが売られている。また地下鉄が整備され、それに伴い地下街も作られ、スターバックス等のカフェが入り、日本の大都市と変わらない状況がある。1990年代半ばとは異なり、フランス料理やイタリア料理の高級レストランも多く、週末になると多くの台北の人々がそ

23 この他には、沖縄で生産されている塩や黒糖が買われていた。沖縄の黒糖は台湾では健康ブームのなかで注目されており、人気のある土産である。

れらを堪能している。さらに2000年代に入り、台湾では観光が根付くようになり、台湾各地にリゾートホテルがオープンし、外国人ではなく台湾人が楽しむものとなっている。

花蓮市のあるインフォーマントは、「与那国の生徒が花蓮に来ると、こちら（花蓮）が都会でびっくりするでしょう」と語ったことがある。また石垣に行った台湾の人間も町が清潔であること（台湾における日本の典型的イメージ²⁴）を除くと、石垣に関する印象は「昔ながら建物がある」などであり、そこに先進性を見出して驚くことは少ない。このような台湾人の八重山へのまなざしは、八重山の人々と共有されていないように見受けられる。

次に八重山に関して台湾に伝わった情報と伝わっていない情報である。伝わった情報の典型を知る手掛かりとなるものが、下記のスタークルーズのオプションツアーの中身である。これは那覇のものであるが、台湾の沖縄認識を把握するうえで興味深い。

①購物嗜鮮之旅【新都心購物圈—北海道海鮮火鍋＋國台日歌曲卡拉OK歡唱（含晚餐）】

②溫泉泡湯之旅【AROMA 海底溫泉〈裸湯〉—北谷町JUSCO（不含餐）】

③美食賞味之旅【NAHA 港—牛排館—新都心（不含餐）】

<http://www.starcruiises.com.tw/libra/info.htm>（2008/10/30 確認）

①はショッピングと海鮮の旅であるが、新都心²⁵でショッピングを楽しみ、北海道の海鮮鍋を食べカラオケを歌うコースとなっている。②は温泉の旅であるが、アロマ海底温泉に行き、ジャスコで買い物をする行程である。③はグルメの旅で那覇港見学後、ステーキを食べ、新都心へというコースである。米軍駐留と関連する「ステーキ」を除けば、典型的な日本本土の観光客がイメージする沖縄観光とは異なる。少なくとも、沖縄に来て、北海道海鮮鍋を食べようとは思わない。いわゆる日本国内のリゾート地沖縄を感じさせるものではなく、むしろ日本の一部である沖縄が想像されている。沖縄が台湾の北にある日本だからこそ、海鮮鍋も価値あるものとして存在する。

現在、台湾に伝わっている日本の一般的な観光情報は、東京や大阪、京都、北海道などの「日本」である。桜や紅葉であり、ディズニーランドであり、刺身や天ぷら、寿司である。何度も日本に足を運んでいる台湾人を除けば、このような日本像を持つ台湾人は多い。日本人が台湾と聞いて、中華料理や足つぼマッサージ、お茶、ナイトマーケットをイメージすると大差はない。

一方、八重山の印象となると、ほとんど見聞できない。八重山に最も近い花蓮などにお

24 この点は、対馬を訪れた韓国人観光客においても同様であった。日本＝清潔は広く東アジアで共有されているイメージである。

25 米軍住宅地の返還後、整備された那覇市北部の地域で大型ショッピングセンターや映画館、さらには空港外大規模免税店がある。

いても、姉妹都市の関係で「石垣や与那国の地名は聞いたことがあるが・・・」という程度である。日本では南国のリゾート地として石垣は有名であるが、台湾で調査したところそのようなイメージをもたれるのは、バリやプーケットである。彼らにとって自らとほぼ同じ緯度に位置する八重山は南国ではない。筆者が確認した八重山観光の宣伝においては、与那国島は地図に掲載されてもいなかった。

したがって八重山そばなどの八重山独自の文化を持つ八重山像は全くと語って良いほど台湾には流布していなかった。清潔な八重山やスタークルーズの例に見るように、八重山も含めて沖縄は「日本」として認識されている。

このような情報の行き違いを考えれば、食や土産をめぐる台湾人観光客と地元住民のすれ違いも理解可能なものとなる。台湾人観光客が求めるものは、台湾で流布しているイメージ「日本」であって、「八重山」ではない。彼らは八重山に来ているのではなく、日本に来ているのである。したがって、彼らが食したいものは八重山そばではなく、日本そばやうどんである。

観光人類学を研究する橋本によれば、観光とは「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」（橋本 1999）である。この指摘は台湾人観光客を対象とした「八重山」観光の不成立に見るように本稿の事例にも該当する。ここまで見てきたように台湾で「よく知られているもの」は典型的な「日本」のモノで、八重山について「よく知られているもの」は台湾にはほとんどないからである。

このような状況を生み出す要因として台湾と、石垣を含む沖縄の地理的近接性がある。筆者の調査で、三度も那覇を旅行した女性がいる。だが、三度も訪れた理由は、那覇が好きだからではない。それほど金銭的に余裕がない彼女にとって、安く行ける日本ツアーが良かった。そこで毎回、最も安い値段の日本ツアーを選んでいたら、毎回那覇になったというわけである。彼女は三度目にして、知人に指摘されて漸く三回とも同じ場所を選んだことに気付いたという。それまで、日本はどこに行っても同じだと思っていたという。

この事例はやや極端だが、沖縄が「安くて近い日本」として台湾の人々に認識されているのは事実である²⁶。地理的近接性が沖縄選択の重要な要因となっている。だが、それは同時に上記の女性のように沖縄をきちんと調べることなく来る現象にもつながる。

沖縄と並んで日本の代表的な観光地である北海道と比べてみよう。北海道は台湾人にも非常に人気のある観光地のひとつである。北海道に関しては費用もかかることと台湾での情報が充実していることもあり、かなりの程度、詳しい情報を調べて北海道を訪ねる。高い費用を払うのであるから、どこかどう違うのか、何があるのかを調べるといっ

26 対馬でも同様なことを語る韓国人観光客は存在した。

27 沖縄の独自文化となると、台湾で知られているのは「台湾と似た文化」というものであり、その場合は「わざわざ行く必要がない」となり、観光戦略としては意味がない。

る。

だが、安い「日本」としてある沖縄の場合、沖縄独自の文化を調べることがほとんどない²⁷。調べようとしても、日本国内のように詳細な沖縄（八重山も含めた）情報が台湾ではすぐに手には入らない。台湾の新聞でツアー広告が毎日でも北海道や東京などとは異なる。したがって、現地の文化ではなく、一層典型的な「日本」を求めて沖縄に来ることとなる。

4. 国民国家のなかの八重山観光

前節で述べた情報のすれ違いに基づく国内での八重山の自画像と他画像と、台湾での他画像（台湾における「日本」の一部としての八重山理解）の違いは、現在も強化されている。その理由として八重山の国内旅行における成功を通じた自画像の強化がある。台湾は八重山の観光業において重要な市場であるが、現実的には八重山の「北」に位置する日本国内が市場としてはるかに大きく、「北」に目を向けていることも事実である。「北」からの客に如何に対応するかが重要であり、台湾は「北」の客の妨げにならないことが求められてきた。

例えば、2002年から2003年にかけて流行したSARS（重症急性呼吸器症候群）において、台湾では患者が発生した。そのため、石垣市において台湾人観光客が来ることによる風評被害を防ぐために、台湾人観光客の石垣上陸が拒否される、または上陸できても商店街のシャッターが下ろされるなどした。

筆者はそれを「希望の『南』と現実の『北』」²⁸と称した。台湾は八重山にとっていつか経済的起爆剤となる希望の土地だが、その希望の現実化を妨げているのが、「北」から大量に訪れる観光客であって、彼らが八重山の観光業においては最も優先される。そのなかで観光文化の売買を通じて、八重山の国内向けの自画像が日々強化されていく。

八重山では、日本本土とは異なる文化を持つという認識がある。さらに沖縄においても沖縄本土とは異なっているという認識がある。そして、その違いを売りに、特に日本本土の人間に対しては、観光文化を売買してきた。日本本土の和食屋で提供されるさしみではなく、八重山そばや独特のてんぷら、チャンプル、パイナップルなどの島のフルーツ、島ラー油を使った食べ物、石垣牛のステーキなどを売り、八重山諸島を船で巡り、のんびりゆっくり過ごす時間を提供してきた。さらには沖縄本島よりも美しいとされる海で過ごす時間を観光の目玉としてきた。日本本土からの観光客はそれらを求めて、八重山に来るの

28 台湾は日本の領土から考えると、西側に位置する。したがって、正しくは「希望の『西』」という表現が正しいが、八重山の北に住み、暖かい南の楽園を八重山に求めてくる日本本土の観光客の視点との関係から、本稿では「南」、「北」という表現を使用する。

であり、それが八重山らしさであった。

八重山の人々も日々仕事に従事し、毎日、海で泳ぎ、島でのんびり過ごしているわけではない。だが、彼らは後者を八重山らしさとして販売し、それが日本本土の観光客のニーズに対応したものであった。そこに、日本国内で創出される観光文化の八重山の人々の自画像を見ることができる。

「ネーション」の成立を論じる内堀は、ある集団が名乗り、その名付けを他の主体が認証することで「ネーション」が成立すると述べる（内堀 1989）。そのような関係は単純に何と名乗るかという、「名前」だけの問題ではない。観光における販売という日々の日常行為そのものによる名乗りと、その行為を意味あるものとして（観光であれば、観光客が楽しむ、買う、評価するという形で）認める名付けも、「名乗りと名付け」の関係に含まれよう。

日本国内を市場とする観光産業として八重山観光が成功していることは、その国内での名乗りと名付けがうまく循環し、成功していることを意味している。名乗り（八重山の人々が「八重山文化」を売る行為）と名付け（日本本土の観光客が「八重山文化」を買う行為）の日々繰り返される反復活動が、八重山の人々において国内市場における「八重山文化」のイメージの内面化に深く作用することは想像に難くない。日々の反復活動によって国内における八重山像に基づく八重山の人々のアイデンティティ、自画像は強化される。

しかし、その自画像は台湾における八重山像という他画像とは異なる。台湾において「八重山」という明確なイメージは存在せず、それはテレビや雑誌で取り上げられる「日本」イメージの一部でしかない。したがって、日本という国民国家内部の観光で形成された八重山の自画像は、台湾では共有されない。

そのため国内の観光市場における自画像を強く持つ八重山の人々は、このような台湾での実情を既述したように知らず、「八重山」＝「日本」の一部という台湾人観光客の八重山像が理解できない。ここに両者の間のズレが生じる。

それだけではない。「日本」を売ることは、「八重山」という自らの位置付けを否定することへと連なる。「日本」というヤマトを売ることは歴史的にも文化的にも「日本」や「本島（沖縄本島）」に対して自己を形成してきた八重山の人々にとってビジネスとして割り切れるものではない。

観光文化とは売買の対象となる文化であり、それは人々が生活する生きる文化ではない。だが、売買する文化は、生活から切り離されたねつ造された文化でもない。生きる文化の何かしらに関連しながら、ある特定の部分が切り出され、編成され、提示された文化である。したがって、売買の対象になるにしても、その観光文化の生成においては自分たちの文化に対する理解と認識が根底に存在する。

八重山と台湾、ビジネスの要素と自己の一部という間のズレを象徴する事例がある。与那国において初めて台湾人観光客を受け入れる時、土産について地元住民とその受け入れ

を支援する那覇の有力華人の間でやり取りがあった。与那国の農産物、海産物を使用した土地の名産品の開発と販売をしたいという地元の考えに対して、それと同時に日本の薬や自転車を売るとよいとその華人は助言した。だが、地元の特産品よりもそれらを優先させて売るとは地元の人間にとって納得できるものではなかった。

かつ各自の主張はそれぞれ自らの成功体験に裏付けされていた。華人是那覇での台湾人観光客の動向を踏まえたうえで、自転車や薬が売れていることからそのような助言を行った。この点は上記した宮古島の事例からも妥当であることが伺えよう。一方、与那国の人々はこれまで与那国にきた観光客を相手に何が売れるかを知っていた。彼らは当然ながら、「日本」のモノではなく、与那国独自の土産品を買いに来ていた。非「日本」であることが観光戦略上も、自己アイデンティティでも重要であった。

結果的には地元の泡盛など一部の地元名産は売れたが、台湾人観光客から「日本」的な土産をもっと欲しかったという要望が多数あり、土産販売に問題が残った。台湾人観光客は台湾における情報から八重山に「日本」を求めたが、八重山の人々は有力華僑の助言ではなく、これまでの国内観光における成功から自らの独自文化を販売したためである²⁹。

この事例に見ることができるように、国内観光の成功体験こそが台湾人観光客受入の失敗の要因であった。国民国家内部で形成される自画像に基づく観光戦略は台湾人観光客受入において逆に負の方向で作用していた。

おわりに

台湾人観光客を対象とした八重山観光の問題点から見えてくることは、自画像形成において国外での他画像が八重山の当事者に共有されない点である。そこからは一般の人々における情報の流通において、国民国家という枠組みが如何に強固であるかが看取できる。国民国家は人的ネットワークや空間の非均質性、構成員の非同質性、不対等性を特徴とする封建国家とは異なり、領土という空間を基盤に空間内部の均質性、構成員の同質性、対等性に基づく国家制度である。それ故にメディアによる想像の共同体（アンダーソン1997）としての国民国家が成立し得る。このことは裏返せば、国民国家内部と外部で空間や情報が切断されることを物語っている。

確かにIT革命は情報の流通という点において、国民国家という枠組みを無効にし、脱国家していくとされた。だが、本稿の事例は情報の流通という点においてさえも国民国家という枠組みを乗り越えることが容易ではないことを示している。八重山、台湾はIT革命を受け、インフラが整備され、両者の間に観光というアリーナが存在する。それにも拘

29 「日本」を求める外国人観光客と「地元」を売る地元業者とのズレは、対馬の調査でも確認することができた。

ならず、単なる情報さえも越境しない状況がそこに生じている。

東京や大阪、京都、北海道などの日本国内でも有数の中心地、観光地の情報は台湾では流れている。逆も然りである。それは国民国家における中心と中心の情報の流通であり、本稿の事例のように国民国家の「周辺」に位置づけられる場合、情報の流通は容易ではない。

さらに台湾人観光客による八重山観光の問題点は、地理的近接性も関与していた。近いが故に「安くて近い」日本のなかで八重山は消費される。北海道のように入念な観光前の情報集めもない。近いということは、一件、観光の成功に有利な材料に見えるが、本稿の事例はそうではないことを物語っている。

かつ台湾と八重山との近接性は、植民地時代に気軽に自由に往来できたことを担保にしたものであり、その記憶が両者の交流・交易の源になっていた。このことは自由に往来、すなわち越境できた記憶が、現在の観光活動において妨げる要因につながっていることを意味する。

近年、交通やIT技術の発達によって国境を越えて頻繁に人々が往復し、ひとつの国家のなかでは収まりきれない活動がトランスナショナリズムとして研究対象となっていることは冒頭で指摘した。それらの研究をレビューした大井は、越境的な空間がナショナリズムから自由ではないにも拘わらず、ポストモダンの解放の空間として考察されてきた問題点を指摘する（大井 2006：148-150）。上杉が述べるようにトランスナショナリズムにおいて多元的帰属がその特徴であるにしても（上杉 2004）、多元性が日本人かつ台湾人などのように国民や民族というネーションを基盤とした多元性であるならば、その多元性は所詮ネーションによって担保されているものであり、ネーションをトランス（超越）したものである³⁰。

トランスナショナリズムについて新たな知見を提示する陳が記述するように国民や民族ではなく、家族や仕事を拠り所に越境を繰り返す人々も存在する（陳 2008）。だが、知識人や大企業など一部の越境の姿のもと、特定の人々の行為が多くの人々においても可能だと考えていないだろうか。どのような地域に住むどのような人々がそのような活動を行っているかは精査する必要があるだろう。

台湾人観光客は国家を超越しようとするものではない。八重山の人々のなかでも国家を実際に超越している人々は一部である。したがって、彼らの行動においてトランスナショナリズムと言える現象を見出そうとすること自体が土台無理なものであることは確かである³¹。だが、本稿で改めて指摘したい点は、国民国家の制限を超えて新たなエリアを構築

30 科学研究費補助金（基盤研究（B））「日本「周辺」地域にみる国境変動とアイデンティティ：韓国・台湾との越境を巡って（代表者 上水流久彦 課題番号：21320165）の2010年度第一回研究会（6月20日 県立広島大学において開催）における福岡大学准教授・宮岡真央子氏の指摘に基づく。

31 物理的な往来と、国家を越境することは区分して考える必要があり、そもそも現代社会において国家を超越した形で存在することが可能であるかは疑問である。

しようという動きにおいてさえも、国民国家というシステムが無意識のうちに関係者を捉え、彼らの活動や認識をそのシステムに絡め取ってしまう、国民国家というシステムの強さと非可視性である。

本稿の事例に見るように「周辺」において、言葉やメディアの壁などのなかで情報に関しても関係者は限られたものにしかアクセスできず、自己認識に国民国家の「外」は多くの場合関与しない。すなわち、「周辺」の情報は国家を超えて共有されることはない。国民国家という制度は単なる情報の共有という点においても大きな力を、「周辺」であればあるほど持っている。安易なトランスナショナリズムへの批判的再考が現在、必要とされる所以である。現在、必要なことはトランスナショナリズムやその希求において、国民国家という乗り越えの対象となるものが如何に入り込んでいるかを考察することである。国民国家の「周辺」に位置づけられる八重山の事例は、それを裏付けている。

謝辞

本報告は以下の支援のもと資料収集を行った。平成16年度県立広島女子大学特定研究「『周辺』で『日本人』になること－『日本』概念の再検討」（研究代表者 李建志）、科学研究費補助金「台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究－「日本認識」をめぐる－」（研究課題番号17251011 研究代表者 植野弘子）、県立広島大学重点研究戦略的特定研究「越境実践と生活圏構築の文化人類学的研究－台湾と沖縄の境界領域にみる交渉と記憶から」（研究代表者 上水流久彦）、トヨタ財団・特定課題「海の東アジアが醸成する文化」の助成プロジェクト「沖縄と台湾の境界領域における越境実践と生活圏構築プロジェクト」（研究代表者 上水流久彦）、科学研究費補助金「日本「周辺」地域にみる国境変動とアイデンティティ：韓国・台湾との越境を巡って」（課題番号：21320165 研究代表者 上水流久彦）。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- アンダーソン, B. 1997 『想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行（増補版）』（白石さや、白石隆訳）、NTT出版
- 陳天璽 2008 「漂白する華僑・華人新世代の越境」高原明生・田村慶子・佐藤幸人編『現代アジア研究1 越境』：297-324、慶応義塾大学出版会
- 上水流久彦 2009 「台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象～与那国町を中心に」、『世新日本語文研究』1（台湾世新大学日本語文学系）：21-37
- カステル, M. 1984 『都市問題－科学的理論と分析』（山田操訳）恒星社厚生閣
- 橋本和也 1999 『観光人類学の戦略－文化の売り方・売られ方』世界思想社
- 黄智慧 2000 「南北源流交匯處：沖縄與那国島人群起源神話傳說的比較研究」『中央研究院民族學研究所集刊』89：207-235
- 石原昌家 1982 『大密貿易の時代 占領初期沖縄の民衆生活』晩聲社
- 又吉 盛 1990 『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房
- 松田良孝 2004 『八重山の台湾人』南山舎
- 三木 健 1996 『沖縄・西表炭坑史』日本経済評論社
- 奥野修司 2005 『ナツコ 沖縄密貿易の女王』文藝春秋
- 大井由紀 2006 「トランスナショナリズムにおける移民と国家」『社会学評論』57（1）：143-

156

- 大浦太郎 2002 『密貿易島 わが再生の回想』 沖縄タイムス社
床呂郁哉 1999 『越境 スルー海域世界から』 岩波書店
植木 豊 1996 「資本・国家・社会的なもの「空間的発現」」吉原直樹編『都市空間の構想力』、
pp. 1-52、勁草書房
上杉富之 2004 「人類学から見たトランスナショナリズム研究－研究の成立と展開及び転換－」
『日本常民文化紀要』24、pp. 1-41.
内堀基光 1989 「民族論メモランダム」田辺繁治編『人類学的認識の冒険－イデオロギーとプ
ラクティス』、pp.27-43、同文館出版

キーワード 国民国家 越境 周辺 観光 台湾 八重山 情報

(KAMIZURU Hisahiko)